

～子供たちの夢をかなえる教師になる！～

東京教師養成塾通信

発行日 平成28年11月12日
<第7号>
発行元 東京都教職員研修センター
研修部教育開発課
電話 03-5802-0318

●第14回講座「各教科等の特性に応じた授業づくり」

平成28年10月16日（日）に、「各教科等の特性に応じた授業づくり」をテーマに塾生による模擬授業を中心とした第14回講座が行われました。今回の講座は大学生等に公開し、東京教師養成塾と連携している大学の学生を中心に約300人が参加しました。

塾生は、この日に行う模擬授業のために7月から各班で準備を進めてきました。当日は、15班で10教科の授業が行われ、塾生全員で力を合わせて検討を重ねた授業を生き生きとした表情で行っていました。

第4学年の理科「人や動物のからだのつくりと運動」の単元の模擬授業をした班では、塾生が考案した教材を使って体の筋肉のつくりや動き方を捉える授業を行いました。担当教授から、オリジナルの教材を作るよう指導を受け、塾生は試行錯誤して教材や学習指導案をつくり、模擬授業に臨みました。当日は、参加した学生が教材を使って、腕の曲げ伸ばしに必要な筋肉について観察・実験を行い、考察したことをグループで共有する学習活動に取り組んでいました。参観者からは、子供が自ら考え、問題解決へと導く授業をつくることで、子供の思考力、判断力、表現力を高めることができることを学んだという感想が寄せられました。



－模擬授業（理科）の様子－



－模擬授業
（特別支援学校）の様子－

聴覚障害特別支援学校の高等部第1学年の地理「様々な気候環境と居住する人々の生活の関連性について考えよう」の単元の模擬授業をした班では、冷帯・寒帯の分布や気候、生活の違いを比較し、それぞれの関連性を学習する授業を行いました。聴覚障害特別支援学校の高等部で特別教育実習を行っている塾生が授業者となり、手話やICT機器による字幕を使った情報保障や聴覚に障害のある生徒に指導するときの配慮点の説明を交えながら模擬授業が進められました。参観した学生からは、視覚的に情報を獲得しやすい環境やICT機器の活用等について質問がありました。

今回の模擬授業を通じて、塾生には日々の授業をつくり上げていくことの重要性を意識し、今後の授業により磨きをかけることを期待しています。

【塾生の感想より】

- ・模擬授業を通じて、授業研究にゴールはないと改めて実感するとともに、授業をつくることの楽しさを感じた。子供の視点で授業や教材を考察すること、入念に準備することを常に意識して授業に臨みたい。

【参加した学生の感想より】

- ・模擬授業では、授業で使うものだけでなく、教室の掲示物も用意されており、綿密に計画されていることを感じた。支え合える仲間やライバルがいる環境があることは素晴らしいと思った。
- ・障害種別の異なる授業を参観して、視覚教材の利用の仕方やチームティーチングにおける教員間の連携などを学ぶことができた。今後の学習指導案の作成や授業づくりに役立てたい。

英語に関する講座を実施しています

東京教師養成塾では、今年度から年間8回の英語に関する講座を実施しています。9月に第3回、10月に第4回の講座が行われました。

塾生の表情から緊張感がなくなり、講師からの英語による質問に自然と答えたり、講師と楽しそうに雑談する姿が見られるようになりました。毎回、英語によるアクティビティが行われ、塾生は自らが外国語に親しむとともに、外国語活動について、実践的に学んでいます。第3回からはALTとの打ち合わせのロールプレイも講座内容に取り入れられ、学校で外国語活動の授業を行うために必要な英語力や会話力の向上に取り組んでいます。

【塾生の感想より】

- ・知識としての英語だけでなく、子供たちが学んで楽しい英語を知った。
- ・実際に外国語活動で取り入れられそうな活動があり、実践してみたいと思った。
- ・リアクションや聞き手の質問が、会話をスムーズにさせることを学んだ。



－アクティビティの様子－

◆ 指導方法・指導技術を身に付ける ◆

東京教師養成塾教授 関口 純一

「活動あって学びなし」という授業を見ることがあります。学習活動をいくら工夫したとしても、児童・生徒に学力が身に付かないのでは、授業とは言えません。同じことが、指導方法・指導技術にも言えます。授業づくりで大切なことは、教科等の目標の達成が第一であり、その特性に応じた指導方法を工夫し、指導技術を駆使するという事です。

1 前提は、各教科等の特性を踏まえること

まずは、学習指導要領及び解説を手掛かりに、各教科等の特性を踏まえた上で、目標を達成するのにふさわしい指導方法を工夫することです。言語活動の工夫やICT機器の活用などは、あくまでも目標達成のための手段です。手段を目的化することのないようにしたいものです。

2 多様な指導方法・指導技術を広く学び取ること

茶道や武道、芸術の世界では、修行の段階として使う「守破離(しゅはり)」という言葉があり、「守」は、基本の型を確実に身に付けることを大切にしています。授業づくりにおける指導方法・指導技術についても同様で、先輩や研修会、書籍などから確かで効果的な情報を広く集め、まねるところから始めるとよいでしょう。私が初任者の頃は、先輩から「よい指導方法・技術を盗みなさい。」と言われたものです。この「盗む」とは、「問題意識をもって学び取りなさい。」という意味だと解釈しています。

3 問題意識をもって指導方法を工夫し、指導技術を磨き、授業改善に生かすこと

児童・生徒が分かる喜びを感じ、確かな学力を身に付けるには、指導方法を工夫し指導技術を磨くことが重要です。これは、授業改善という問題意識を常にもって、授業づくりを重ねることが必須です。この過程を経てこそ指導方法・指導技術は身に付きます。

伸長期における塾生の授業づくりでは、授業の質を高めるために、ねらいの達成を目指した発問の精選や教材の効果的な活用、評価の視点に立った机間指導などの工夫を大切にしよう指導しています。

◆ 子供のよさを引き出す ◆

東京教師養成塾教授 水野 久美恵

子供のよさを引き出す教育が求められています。それは、子供の自己肯定感や他者肯定感を高め、夢や希望をもってよりよく生きる力を培うためです。

子供のよさを探するとき、陥りやすい捉え方が二つあります。一つは、他の子供と比べて何がよりよくできるのかという個人間の相対比較をしてよさを探すこと、二つには、一人一人の個人内で何がよくできて何がそうではないかという個人内の相対比較をして、よりよくできるものを探すことです。よさは、比較をして捉えてはならないのです。また、見る側の価値観も大きく作用することにも留意する必要があります。

よさとは、その子供がもっている各種の魅力であると捉えることができます。よさはたくさんあります。子供のよさを引き出すということは、子供のよさをたくさん見いだし、よさを子供に自覚できるようにして、よりよく伸ばしていくことです。

私の担任時代の実践から、五つを紹介します。

- 1 休み時間にも子供とともにあり、大いに遊び、全員と関わるよい機会とする。
- 2 一日1回は全員の子供と会話する。よさの記録を蓄積する。
- 3 児童主体の授業を行い、机間指導を含めて、子供にプラス評価をたくさん伝える。
- 4 「先生と話をする日」を設け、個別に、グループで、子供とじっくりと向き合う。
- 5 全員を対象に、学級会や休み時間を使って、構成的グループエンカウンターを行い自己肯定感や他者肯定感を高め、集団の意識を高める。

教師は、多くの時間を子供と過ごすけれど、一人一人の子供とどれだけ過ごしているのか振り返る必要があります。子供とただ関わるのではなく意図をもって関わるのです。

塾生には、真っすぐに子供を見ることができているのかを、日頃から指導しています。子供はかけがえのない存在であることを常に忘れないことが大切です。